



東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター
The Newsletter **CNEAS**

第 76 号

● 目次 ●

巻頭言「遺伝学と人文学」	1
最近の研究会・シンポジウム等	
国際交流 ノボシビルスク大学 日本アジア講座	2
「日露交流の当事者になってーノボシビルスク滞在記ー」	2
学術講演会 講座：地域の歴史を学ぶ◎大崎 「江戸時代の民間天文暦学～名取春仲が伝えたもの～」	3
学術講演会 東北大学東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所 第 8 回学術交流連携講演会	
「北海道と本州のつながりを遺物から紐解くー歴史を語る、物言わぬ『もの』たちー」	3
私の東北アジア研究 「[体制の存続] からみる非民主主義体制下の司法機関」	4
客員教授紹介	5
センターの紹介	6
活動風景「カンボジア報告ー地雷除去に思うことー」	8
編集後記	8

巻頭言 **遺伝学と人文学**

東北アジア研究センター副センター長
千葉 聡

現在私たちが見ることができる多様な生物は、共通の祖先から変化し、枝分かれしてきたものである。この進化の歴史を知るための遺伝学の方法が、分子系統である。これを用いて、生物の遺伝子の違いから、どの生物とどの生物が、他の生物に比べて新しい時代に枝分かれしたか、すなわち遺伝的に異なるものになったかを知ることができる。さらに、いくつかの仮定を設けることで、ある 2 種の生物、たとえばヒトとチンパンジーが、今から何世代前、あるいは何年前に分かれたかを推定することもできる。ただし、生物は一方的に別の種類へと変化するわけではない。一旦、互いに交配することが無くなり、遺伝的に分化した 2 種が、再び交配して遺伝的に混ざり合うことがある。たとえば現生人類は、絶滅したネアンデルタール人と過去に交雑したことが遺伝学の証拠から判明している。そろそろ花粉病に悩まされる季節だが、このアレルギーに関係した遺伝子には、交雑によってネアンデルタール人から受け継いだ遺伝子が含まれている。分子系統は、過去にこのような雑種ができて遺伝子が混じりあったことも推定できるのである。

さて、遺伝子の本体は DNA という糖、リン酸と塩基で構成された高分子である。このうち塩基には異なる 4 つの種類があり、これらのいずれかひとつの塩基と糖、リン酸のセットで構成されたヌクレオチドが連結したものが DNA である。単純化していえば、DNA はこの 4 種類の高分子の“文字”が、

ずらっと一列に並んだ文章のようなものである。分子系統学は、この情報としての遺伝子の性質を利用して、その変化の履歴を推定しているのである。ということは、分子の文字だけでなく、人間が作った文字の情報だって、同じよ

うに扱えるのではないか？実は、そうした試みが、いま世界的に広がりつつある。言語の歴史や文字の変遷、さらには物語の成立過程など、さまざまな文化の履歴が、分子系統の手法を使って推定されようとしている。たとえばこの手法により、民話「赤ずきん」は、「おおかみと 7 匹の子やぎ」と共通の民話から分化したものであること、そして後者の誕生から約 1000 年後に派生したことが推定されている。その妥当性には、まだ議論の余地があるが、遺伝学と言語学、民俗学、文学という全く異質な文理の学問領域の融合という点は、注目すべきであろう。

遺伝学の手法は、文化の歴史を理解するうえで、強力なツールとなる可能性がある。こうした大胆な文理融合研究にチャレンジする上で、東北アジアという地域、そしてそこを研究の場とする我がセンターは、最適場所ではないだろうか。ぜひ野心的な挑戦を試みたいと思う。



最近の研究会・シンポジウム等

国際交流

ノボシビルスク国立大学日本アジア講座

東北アジア研究センターでは、2008年に副センター長岡洋樹教授（当時）と高倉浩樹教授が大学間学術交流協定締結校であるロシア・ノボシビルスク国立大学人文学部を訪問し、「日本アジア講座」に関する覚え書きを人文学部長パーニン教授と取り交わした。2009年から5年間、東北大学等で日本に関わる研究を行っている一線の研究者がノボシビルスク国立大学人文学部東洋学科主任エレナ・ヴォイティシク教授の日本語専攻の学生を対象とした講義を行ってきた。近年この活動は、東北大学ロシア交流推進室の企画として本センターが実施しており、総長裁量経費等からの経費支援をいただいている。昨年10月までに9回の日本アジア講座を開催し、15名の教員が、日本の歴史・文学・美術・映画など様々なテーマで18回の講義を日本語あるいは英語で行っている。また講座の開催に当たっては、ロシアの学生による卒業研究のプレゼンテーションが行われ、訪問した教員がコメントを行うことが慣例となっている。ロシアの学生の日本に対する関心は非常に高く、在籍学生の語学能力も優れている。学部3・4年生になると、日本語による

講義をほぼ通訳無しで理解できる。本年度は2017年11月7日～10日に東北アジア研究センター・高橋陽一助教と岡洋樹教授が訪問し、高橋助教が「日本の歴史と旅」（日本語）、岡教授は「満蒙の彼方：帝国主義日本の北方観」（英語）と題する講義を行った。2008年に始まるこの交流活動は、ノボシビルスク大学で日本・アジアをテーマに研究している教員・学生を招聘して、本学の教員・学生と英語で研究発表会を行う「日露ワークショップ」（2013年から実施）とともに、ノボシビルスク大学から高い評価をいただいている。この活動を通じて、研究生や大学院生の交換もはじまっており、今後のさらなる展開が期待される所である。（岡 洋樹）



東洋学科で（左から2人目ヴォイティシク教授、岡教授、高橋助教） 日本アジア講座会場の学生たち

日露交流の当事者になってーノボシビルスク滞在記ー

2017年11月7日から10日まで、日本アジア講座参加のためロシア・ノボシビルスク国立大学に滞在した。8日には人文学部東洋学科の学生に「日本の歴史と旅」と題して講演し、9日にはノボシビルスク市の施設であるシベリア北海道文化センターでも講演した。国立劇場でのバレエ鑑賞や博物館見学の時間もあり、充実した時間を過ごすことができた。気温は日中もほぼ氷点下であったが、真冬の仙台ぐらいの寒さであり、この時期の当地としては温暖とのことであった。

日露交流は、18世紀後半に日本人の不慮の漂流がきっかけで始まった。当事者となった大黒屋光太夫は、言葉の壁にかなり苦しんだという。私も現在と過去の日本語が理解できるだけの、ある意味江戸時代人の名残りのような言語能力者だが、今回の滞在中言葉の壁に苦心することはほとんどなかった。なぜなら、エレナ・ヴォイティシク先生をはじめとする担当の先生方や学生たちが、流暢な日本語で私に接してくれたからである。学術機関で日本語を専攻する以上、これは当然のことかもしれない。だが、シベリア北海道文化センターで数多くの子供が日本語を学び、私の話に熱心に耳を傾ける様子には感嘆するほかなかった。ノボシビルスクはシベリアの

中心都市だが、在住日本人は稀少である。大黒屋光太夫の時代には存在すらしていなかった。そのような都市にこれだけ日本語が根付いていることが、日本研究者の私にとって大変印象的であった。

現地を離れる直前の10日に、日本語での学生の研究発表を聞く機会に恵まれた。その中には、浮世絵や文化財保存といった日本史に関するものもあった。学生は主にインターネットを駆使して研究材料を入手しているが、より深く調べたくても手段がないように見受けられた。このままでは、せっかくの日本への関心が開花することなく枯れてしまう。日本史の最新の研究状況の発信や歴史資料のデジタル化など、日本の歴史研究者が当事者として担いうる役割も相当あるように感じられた。

（高橋陽一）



ヴォイティシク先生（右から6人目）と

学術講演会 講座：地域の歴史を学ぶ◎大崎

「江戸時代の民間天文暦学～名取春仲が伝えたもの～」

(2017年11月18日)

東北アジア研究センター上廣歴史資料科学研究部門と、岩出山古文書を読む会が主催する「講座：地域の歴史を学ぶ◎大崎」は、2017年11月18日(土)に宮城県大崎市古川の大崎生涯学習センター(パレットおおさき)にて開催された。本講座は2012年の研究部門発足以来開催してきた講演会で、例年大崎市岩出山でおこなってきたが、今年は会場を同市古川に移し、また、プラネタリウムを併設する施設ということもあって趣向を凝らしたものとなった。全体テーマはタイトルにある通り、江戸時代の天文暦学者・名取春仲(1759年生～1834年没)を取り上げ、当時の天文暦学を考えるという企画であった。

名取春仲は、現在の大崎市岩出山の造り酒屋・名取屋の長男として生まれた。幼いころよりさまざまな学問を学ぶが、とくに傾倒したのが天文学・暦学であった。彼は20歳頃から天文学を学び始め、仙台藩天文方の藤広則に師事し、ついで暦学をつかさどる公家の土御門家の内弟子となった。山形方面にも門人を抱えた、知る人ぞ知る、江戸時代に活躍した学者である。

遊佐徹氏(大崎生涯学習センター)の講演「名取春仲が見た星空—古代中国星座の世界—」では、プラネタリウムに投影された映像をもとに、春仲が親しんだ中国星座の世界について解説していただいた。つづいて場所をセンター内の多目的ホールに移して、黒須潔氏(仙台郷土研究会理事)に「名取春仲と坤輿万国全図・天文図屏風」と題してご講演をいただいた。黒須氏が紹介された仙台市博物館所蔵の坤輿万国全図と天文図屏風はいずれも春仲が残したもののだが、これらに解析を加えることで現代における天文学・暦学とは異なる春仲の宇宙観・世界観の一端が明らかにされた。

当日、会場に足をお運びくださった方は92名。みなさん、一様にご満足いただけたようである。今後も新しい試みを加えた、斬新なテーマの講演会を企画していきたいと考えている。

(友田昌宏)



黒須潔氏の講演

東北大学東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所 第8回学術交流連携講演会

「北海道と本州のつながりを遺物から紐解く

—歴史を語る、物言わぬ『もの』たち— (2017年11月23日)

北海道の伊達市噴火湾文化研究所(以下、研究所)と東北アジア研究センターの共催による学術交流連携講演会が、平成29年11月23日に東北大学100周年記念会館川内萩ホール会議室で開催された。研究所と当センターは、伊達市と仙台市が歴史的に緊密な関係を有していることに立脚して、2006年に学術交流協定を締結し、現在に至っている。連携講演会もその一環で、それぞれの研究者が一年おきに相手方を訪れる形で行われている。第8回となる今回は、研究所の噴火湾文化専門委員で、解剖学と形質人類学を専門とされる百々幸雄氏と、東京都公文書館専門員で、研究所と共同研究を展開する工藤航平氏を講師にお迎えした。

はじめに研究所の学芸員で、互理伊達家第20代当主の伊達元成氏に、研究所の活動をご紹介いただき、続いて百々氏に「有珠モシリ遺跡の発掘」と題してご講演いただいた。骨格の類似から縄文人はアイヌの祖先と見られるにも関わらず、両者の間には2000年以上の時間的空白があった。この謎に対し、縄文時代の遺跡である伊達市有珠町の有珠モシリ遺跡から

収集された人骨により、北海道アイヌは縄文時代を遡って北海道の縄文時代人まで辿れることが紹介された。工藤氏からは「北海道に伝わる東北地域の古文書はなにを語るのか」と題して、移住者によって北海道に持ち込まれた古文書の持

つ意味について報告された。そこに書かれた内容は北海道の歴史や文化を語るものではないが、その特徴的な「群」としての構成を読み解くことで、それが北海道に所在する意義を見いだせるという報告は、歴史資料の新たな価値を示すものだった。

今回の表題は、古代に生きた「者」と、古文書などの「物」が、ともに言語以外で歴史を語るという趣旨から付けられた。当日は開場前から入場待ちの列ができ、120名を収容する会場がほぼ満席となる盛況ぶりだった。

(後藤章夫)



講演風景(演者：工藤航平氏)

「体制の存続」からみる非民主主義体制下の司法機関

内藤寛子

1970年代後半に民主化の「第三の波」が発生し、非民主主義体制を採用していた多くの国家が民主主義体制へ移行した。1970年代半ばには全体の2割ほどでしかなかった民主主義国家の割合が、1990年代末には5割近くを占めた。その後、自由な選挙を通じて実現される民主主義は政治体制のいわば標準となった。

当時、多くの研究者は、民主化を遂げた国家（東欧、南米、東アジア地域など）を事例にその要因を分析した。その際に用いられた理論として、とりわけ有名なのが「近代化論」である。近代化論とは、民主主義体制と高い経済水準が強い相関関係にあることを明らかにし、経済成長が進めば民主化が発生すると主張した理論である。これは、ソ連、韓国、台湾など東北アジア地域の民主化を分析する際にも適用された。そして、このような東北アジア地域の事例をもとに、今後5年以内に民主化するであろうとされた国家が、中国であった。1990年代初頭の中国は、1970年代後半から推し進められた経済政策の結果、高い経済成長を維持する一方、国内政治においては、1989年6月4日に発生した天安門事件を機に不安定化していた。このような状況を目の当たりにし、中国の国内政治に関する研究は、将来の民主化を展望し、近代化論に傾斜していったわけである。

しかし、この「中国が民主化する」という展望はものの見事に裏切られた。なぜ中国は民主化しなかったのだろうか。言い換えれば、なぜ中国の非民主主義体制は存続しているのだろうか。私は、非民主主義国家としての中国の政治構造を比較政治学の立場から研究している。そのなかでも、とりわけ注目しているのが司法制度である（写真1）。

中国に限らず、政治学において、司法制度の研究はマイナーと言わざるを得ない。なぜなら、民主主義体制下においても、司法制度は議会および選挙制度、官僚機構と異なり、政治的機能を持ちにくいと考えられてきたからである。非民主主義体制下にある中国の司法制度に対する見方はさらに厳しい。中国の司法機関である人民法院は、中国共産党による命令的指導の下でしか活動することを許されず、民主主義体制の司法機関が持つ最も特徴的な政治的機能である違法立法審査権も付与されていないことから、政治的に機能していないとみなされてきた。

では、もし人民法院が政治的に機能していないとするならば、なぜ中国共産党は人民法院を手放さないのだろうか。私は、これまでの見方には、非民主主義

体制下における政治論理という視点が抜け落ちていると考える。このような立場からすれば、民主主義体制の司法機関が持つ政治的機能を持たないからといって、人民法院が政治的機能を持たないということにはならない。だとすれば、中国共産党は人民法院にどのような役割を与えているのか、非民主主義体制下での人民法院の政治的機能を捉えなおす必要がある。こうした問題関心から、私は、中国共産党が常に抱える政治的命題である「体制の存続」という観点から、人民法院の政治的機能を再検討してきた。

このような私の研究は、中国を含む非民主主義体制を表現する際に度々使われる「独裁」の新しい解釈にも繋がる。「独裁」という言葉から連想されるイメージは「政治的指導者あるいは集団が、抑圧的に社会を管理している状態」であろう。このことから、当然、独裁者も非道徳的で暴力的であるという見方が主流である。しかし、多くの独裁国家の実態はというと、ただ抑圧的に社会を管理すればよいというほど単純なものではない。あまりにも社会を抑圧しすぎると、社会が暴動を起こすリスクが高まるという社会統制の問題が発生する。また、社会からの暴動を恐れ、より強固に社会を管理しようとする、体制内部の暴力機関（主に軍隊や警察）の力が強まり、クーデターが発生しやすくなるという権力分有の問題が出てくる。独裁者は、現体制を維持するために、選挙という制度を持たない中で、体制内外の政治的要求を把握し、この二つの問題を解決しなければならない。私は、中国共産党が「体制の存続」をはかる上で機能させる機関の一つとして、人民法院に着目し、独裁者が抱える政治運営の実態を描き出そうとしている。これは、新たな独裁国家像を提示することにつながるであろう。



(写真1) 中国共産党のマークである五星が掲げられた人民法院

東北アジア研究センターには、世界各地から東北アジアの研究を手掛ける専門家が客員研究員（教授・准教授・研究員）として来日され、私たちと一緒に共同研究などを進めています。



●客員教授
ゼドゲニゾフ
ドミトリー

ゼドゲニゾフ博士 (ZEDGENIZOV, Dmitriy: 日本でのニックネームは「Dima-san」) は1973年生まれのロシア人です。サハ共和国の首都ヤクーツク出身です。1990年にノボシビルスク国立大学地質学地球物理学部を卒業後、ロシア科学アカデミー・シベリア支部ソボレフ地質学鉱物学研究所で博士号 (PhD) を取得 (学位論文「Peculiarities of microdiamond genesis from kimberlite pipes Udachnaya and Sytykansкая」) しました。2012年には同研究所から理学博士号 (Doctor of Science) が授与されました (学位論文「Composition and evolution of crystallization media of fibrous diamonds from lithospheric mantle of the Siberian platform」)。Dima-san はダイヤモンドの成因論や上部マントルプロセスに関連する研究で国際的に知られています。これまでに日本学術振興会外国人招へい研究者などの身分で東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設に中・長期の滞在を経験しています。国際学会やワークショップでも複数回来日しており (仙台も今回が初めてではありません)、東京大学、愛媛大学、東北大学など、国内に沢山の共同研究者

がいます。

Dima-san が所属する研究所の親組織であるロシア科学アカデミー・シベリア支部と東北大学との間には、大学間学術交流協定が1992年8月に締結され、さらにソボレフ地質学鉱物学研究所と本学理学研究科・理学部との間には部局間学術交流協定が2008年11月に締結されています (現在、辻森が主担当)。博士が兼務するノボシビルスク国立大学と東北大学との間にも、2003年7月に大学間協定の締結があり、東北アジア研究センターの文系・理系両分野で積極的な学術交流が続き、研究成果を上げています。従って、Dima-san の招へいは日口の学術交流を一層促進しようという相互の願いに沿ったものです。ダイヤモンドの研究は地球惑星科学や材料科学的な研究だけでなく、経済的な価値から、その採鉱と流通に関しては社会科学的研究も期待できます。滞在期間中、東北アジア研究センターのロシア、及びその周辺地域の地域研究に携わる研究者らとの学術交流を積極的にはかり、東北アジア研究センターの研究理念を共有した上で、将来的な地域研究のネットワークの発展を目指します。 (辻森樹)



●客員教授
リトビネンコ・
タマラ

リトビネンコ・タマラ教授は、ウクライナ出身でロシア科学アカデミー地理学研究所の上級研究員である。2018年1月から3月までの間、東北アジア研究センター客員教授を務めている。

受け入れ教員の筆者とは2015年4月に富山で行われた北極科学サミット週間 (国際北極科学委員会主催) の科学シンポジウムの分科会で知り合った。北極圏の資源開発と人口動態を人文地理学的観点からアプローチしており、筆者との関心も重なり、学会中にいろいろと意見交換を行った。当時、彼女は同志社大学経済学部の客員教授を務めていたこともあり、同年7月にセンターに招聘し、講演会を実施した。その後もメールでの交流を続けてきたが、筆者が現在ロシア北極圏の資源利用と気候変動についての学際的研究を進めていることもあり、リトビネンコ教授との交流を通して、これまで交流実績のなかったロシアの地理学分野との共同研究を構築することを試みるために、客員教授として招聘する事になった。

客員教授としての滞在中、先生は東シベリアの資源開発と人口動態・エスニ

ティという課題で研究を行っている。彼女自身、この分野についてこれまで文化人類学分野としての研究交流はあまりなかったということで日本において新しい研究交流も始めた。その一端として、2018年1月には東京で行われた第五回国際北極シンポジウムに参加し、筆者と共同で「Synthesizing Local Interactions between Permafrost and Human Societies」分科会を開催した。この会議では、国内外の北極圏に係わる人類学者を招聘し、最新の北極社会科学に関する研究発信をすることができた。またリトビネンコ教授がこれまで共同研究をしてきた一橋大学の経済学分野の研究者との交流もでき、筆者自身も研究交流の枠組みを広げることとなった。

これまでセンターの文化人類学分野におけるロシアとの学術交流はシベリアが中心で、モスクワとは十分なかたちでは行われてこなかった。リトビネンコ教授との交流を通して、この点を新たに開発することができる見込みである。また筆者の大学院教育においても様々な形で支援してもらっている。 (高倉浩樹)

センター
の紹介

1

上廣歴史資料学研究部門



資料整理作業をする高橋陽一助教（古文書を1点ずつ中性紙封筒へ収納）

2016年度企画資料展示「吾妻家文書展」のポスター（大崎市岩出山で開催）

上廣歴史資料学研究部門は、2012年4月に公益財団法人上廣倫理財団の助成を受けて東北アジア研究センターに設置された寄附研究部門です。センターでは2003年に発生した宮城県北部地震をきっかけに、地域で継承されてきた歴史資料の救出および保全をおこなってきました。その後、2011年3月11日に東日本大震災を経験し、歴史資料の重要性が社会的にも改めて認識される一方、上廣倫理財団では人文学による被災地の復興支援を積極的に推進し、東北大学およびセンターとの連携を図り、上廣歴史資料学研究部門の設立へと結びついていきました。

研究部門は平川新部門長（客員教授、宮城学院女子大学学長）と、荒武賢一郎副部門長（准教授）、高橋陽一助教、友田昌宏助教を専任教員に、歴史資料に関するさまざまな調査・研究活動を実施しています。

私たちは「地域と歩む歴史学へ」というテーマを掲げていますが、もっとも大きな仕事は歴史資料の所蔵者、そこに住む人々、歴史の勉強をしたい方々、といった主人公が「地域」を深く理解できる環境づくりだと思っています。設立から6年間の経過しましたが、この地域の歴史を深める作業によって学術研究が進展し、地域文化もさらなる向上がみられたと確信しています。

普段の活動は、まず歴史資料の存在をみなさんによく知ってもらうことから始まります。日本列島は世界的にみても歴史文書の宝庫で、とくにその特徴は首都や政府、役所に集中するのではなく、大多数が古くからつながる村や町、具体的には民家にのこっていることです。宮城県下を中心に、私たちはそれらの貴重な「古文書（こもんじょ）」を良好な保存状態にしたあとで、デジタルカメラで撮影していきます。もちろんこれで万全というわけではありませんが、先人たちの足跡を未来へとつなぐ仕事を担っていると考えています。

一連の作業によって、所蔵者のみなさんには大切な文書をのこしていくと認識していただけますが、それをご近所や地域住民にも広く知っていただくことが重要です。研

究部門では、専任教員が県下の各地で古文書講座を開講しています。これは、自治体や地域の歴史研究団体との共同企画で、基本的にはその地域の歴史資料を住民の皆さんによって解読し、それを基礎に研究をしていくというものです。2018年現在、仙台市内各地のほか、大崎市岩出山、白石市、村田町などでその取り組みを展開しています。そして成果発信としては、大崎市で毎年秋に開催する「講座：地域の歴史を学ぶ」（本紙3ページ掲載）や、川崎町や村田町、岩手県一関市で実施した現地報告会で、地元のみなさんに「わが町の歴史」に親しんでもらおうと努めてきました。また、主催講座だけでなく、依頼を受けた講演会で私たちが研究のなかで知った新たな発見をお伝えすることを心がけています。

これまでの活動から、地域社会との共同作業は予想以上に大きな収穫があったと思っていますが、さらにもう一步進んでいくためにいくつかの計画を検討中です。そのひとつは、自治体職員の方々との緊密なネットワークづくりと、情報の共有です。市町村には文化財保護を担当される職員、博物館や歴史資料館、図書館といった文化施設で活躍するみなさんがおられます。私たちは地域ごとの調査で個別に相談をして、一緒に資料の救出や講演会・資料展示の企画をやっていますが、「横のつながり（自治体同士の連携）」を深めていく必要性は誰もが感じているところです。それを研究部門では「歴史資料活用講座」と名付け、自治体職員のみなさんとお互いのスキルアップや連携強化を目指しています。

これからも災害に対応し、地域社会に貢献できる新しい歴史学のスタイルをつくる、という目標に向かってがんばっていきます。また読者のみなさんにもご支援を頂戴できれば幸いです。（荒武賢一郎）

*上廣歴史資料学研究部門ホームページアドレス

<http://uehiro-tohoku.net/>

*川北合同研究棟1階「東北アジア研究センター資料展示スペース」で研究部門の紹介をしています。

センター
の紹介

2

図書室

東北アジア研究センター図書室の所在地は、川北合同研究棟2階218号室です。7年前の東日本大震災後の合同棟の改修工事を行う間、スタッフは学内を転々とし、図書資料は長期の倉庫保管が続いたため資料の劣化とカビの大量発生の一因にもなりました。そのため2017年度より本格的な対策を検討し、環境改善工事を行いました。

カビ対策やクリーニング、その後の図書搬入に関して、ご協力頂いた本館スタッフの皆様、関係各位に深く感謝申し上げます。環境改善後は、再度カビが付かないように大型の除湿機を2台導入し、24時間365日稼動しております。

書庫のカビ対策と同時に受付カウンターを3階303号室へ移転し、書庫に隣接していた事務スペースを閲覧室に改修する工事を行っております。閲覧スペースには壁一面に雑誌の棚を配置し、閲覧用のテーブルやソファなどを設けて快適な空間になる予定で、現在、4月の開室および貸出業務再開へ準備を進めているところです。

図書室スタッフは2名です。主な業務は図書雑誌の受

入・貸出・出版物発送などです。開室時間はリニューアル前と同じく平日の9

時30分から16時(昼休み閉室:12時から13時)です。資料の大半は教員の手元にあるため、3階にあるカウンターで手続き後、スタッフが必要な資料を持ってくるシステムです。東北大学附属図書館の利用証があれば貸し出し可能ですが、すぐに貸し出せないことも多いため、あらかじめ、資料をご予約の上、ご来室頂くことになっております。貸出限度冊数・貸出期間は、図書が5冊2週間、雑誌は当日返却です。学外の方は申し訳ございませんが、当日のみの貸し出しになっています。

閉室期間中、ご不便ご迷惑をおかけしている各館、利用者の皆様にお詫び申し上げます。

(海口織江、佐々木理都子)



電動書架と大型除湿機(右側)

センター
の紹介

3

コラボレーション・オフィス

コラボレーション・オフィスは、2009年4月に東北アジア研究センターに設置されました。現在2名のスタッフが雇用され、文系7部局(文学研究科、経済学研究科、法学研究科、教育学研究科、国際文化研究科、教育情報学研究部・教育部、東北アジア研究センター)の部局長協議会のもとに設置された運営委員会により運営されています。

オフィスは、理事提案による総長裁量経費と東北アジア研究センターの経費によってまかなわれ、本学の人文社会科学系諸部局の研究活動や社会貢献活動に関わる連携促進のために川内地区におけるアカデミック・スタッフ業務のセンター的役割を果たすことと、東北アジアに関する統合的地域研究の遂行のため、学内外の研究組織・研究者との連携を支援することを目的としています。これまで、文系部局で実施するリベラルアーツ・サロンの開催支援、シンポジウム、講演会などの企画・運営協力、東北アジア研究センターの広報・出版活動への支援を主な業務として行ってきました。

リベラルアーツ・サロンは、文系7部局に加え、高度教養教育・学生支援機構からも講師推薦のご協力をいただき、

年6回開催しています。来年度前期は6月8日(金)に佐藤嘉倫教授(文学研究科)、7月27日(金)に野村啓介准教授(国際文化研究科)、9月28日(金)に鈴木岩弓総長特命教授(教養教育院)を講師にお迎えします。ぜひ会場に足をお運びください。

また、広報支援の一環として、文系7部局が主催する講演会、シンポジウムのポスターのデザイン制作も行っており、納品希望日の二か月前より相談を承っております。

センター講演会などの運営では、毎回、教員・教育研究支援者の皆様にご協力をいただき本当にありがとうございます。今後も様々な研究活動の発信、広報の一助となれますよう、スタッフ一同業務に邁進していきたく思います。至らぬ点多々ありますが、どうぞよろしく願いいたします。

(畠山瑞、熊谷香)



オフィスで制作したポスター

活動
風景

カンボジア報告 —地雷除去に思うこと— 菊田和孝

2月初旬に訪れたカンボジアについて述べたいと思う。

首都のプノンペンには高層ビルが立ち並んでいる。イオンも進出している。中国資本の高級マンションの建設ラッシュが進んでいる（一般国民には手の届かないものだが）。それに比べて、シェムリアップはまだ発展が遅れている。シェムリアップはアンコールワットで名高い観光地であるが、高層ビルはなく車で30分もするとひらけた草原に出る。シェムリアップから東へ1時間ほど、牧場に囲まれたところにカンボジア地雷対策センター（Cambodian Mine Action Center: CMAC）の実験場がある。そこで新型探知機の性能試験を行った。

CMACでは金属探知機だけでなく、様々な手法で地雷除去を行っている。今回はちょうど実験場でネズミを使って探査する方法を見学することができた。空港セキュリティに犬が使われているように、犬を用いた地雷除去が行われているが、ネズミも同じように地雷探知に利用できる。動物の嗅覚を利用し、地雷に含まれる火薬の臭いに反応するようトレーニングしているのである。この探知手法の練習風景を見学させてもらったのだが、その指導員はタンザニアから派遣されていて、国際的な連携を見ることができた。

今回の訪問では最新型地雷探知機のテストを行った。金属探知機に加えて地中レーダが搭載されていて、地中のイメージングが行える。以前のモデルよりも小型化がなされている。取り扱いがより容易となるため、使用者の負担の軽減が期待される。

実験場の土地に埋められた模擬地雷を対象としたテストを行った。種類は対人地雷、対戦車地雷、不発弾である。これらは浅いもので5cm、深いものでは1m近くまで埋めてあり、実際の状況が再現されている。金属探知機の反応は良好で、解析したレーダ画像からは地雷の深度と大きさが確認できた。

地雷の実験場のすぐ隣には昨年完成したばかりの地雷博物館（Peace Museum of Mine Action）があり、こちらも見学する機会が得られた。地雷やクラスター爆弾などが数多く展示されていて、対人地雷だけでも8種類が陳列されている。地雷や不発弾の生産国は中国、ソ連、アメリカと様々である。

建物の外には地雷が仕掛けられている状況が再現されていた。地中に埋められている他、アリ塚に爆弾が埋設されてい

地雷探知機の
テストの様子



実際に除去された地雷



るものもあった。こういう残された爆弾に遊んでいる子供が誤って触れることがあるため、とても危険である。かつてはアンコールワットの土地にも地雷が埋められていて、人が立ち入ることは出来なかった。現在、都市部や観光地での除去は完了しているため観光客が心配する必要はなくなっているが、そこから少し外れた土地には未だ多くの地雷が残されたままである。特に農地に地雷が埋められているケースでは、生活上大きな障害となる。このような地域でCMACは地中の地雷を除去し、元の所有者が再び農業ができるような事業を行っている。人口密集地の除去は進んでいるが、北部のタイ国境付近や南部地域全般には依然として地雷や不発弾の脅威が存在し続けている。

地雷博物館には戦争以前の古い街並みの写真も展示されている。穏やかな美しい風景だ。写真に映る橋はすでに破壊されて存在しないが、日本からの援助で再建されたという。プノンペンからシェムリアップの移動の際に実物を見ることができた。

日本は長年に渡りカンボジアへの地雷対策援助を行っている。日本から贈られた設備を展示するコーナーでは、地雷探知機や地雷除去用重機などが並んでいる。

館内では観光客の姿を見ることはなかった。センターの方の話によるとまだまだ認知度が低いとのことのことである。日本人だけでなく、カンボジアを訪れる世界の人々に是非ここを訪れてほしいと思った。戦争が終わった後も残り続ける惨禍を目にして、そこで生き続ける人々の苦難に思いを馳せてほしい。

短い滞在だったがカンボジアの今に触れて、この研究の大切さを再認識することができたと思う。

編
集
後
記

今回の内容を読み返してみると、平成29年度も東北アジア研究センターは大忙しだったと改めて思います。本紙のラインナップもなかなか迷うところで、学会賞の受賞や研究シンポジウムはたくさんあったのですが、すべてを取り上げられず申し訳ありません。また、今号は普段の活動を支える図書室やコラボレーション・オフィスの記事を掲載しました。ご協力いただいた執筆者のみなさん、ありがとうございました。（荒武賢一朗）

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第76号 2018年3月27日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

